アジア研究教育ユニット　2024 年度教育研究報告書

事業課題名	英語による国内フィールドワーク
代表者名	**安里和晃**
事業概要 （600 字程度）	本プログラムは、日本社会を深く理解することを目的とし、国内で実施される英語によるフィールドワークを通じて、参加者が現場に根ざした学びを体験できる機会を提供するものである。地域社会や現地の機関を訪問し、関係者との対話を通じて、日本が直面するさまざまな社会課題――たとえば少子高齢化、排除と社会包摂、多文化共生、福祉、都市開発などに向き合う。 使用言語は英語であり、海外からの留学生を含む多様なバックグラウンドを持つ学生が参加できる設計となっている。異なる視点を持つ学生同士が協働しながら、現地での観察や調査、議論、プレゼンテーションなどを行うことで、国際的な視野と実践的な問題解決能力を養うことを目指す。
成果の概要 （800 字程度）	本事業では、2024 年度を通じて、国内各地において多様な社会課題に関する英語によるフィールドワークを実施した。 4 月には大阪市西成区釜ヶ崎を訪れ、日本の労働政策、福祉政策、ホームレス支援施策、まちづくりに関する実地調査を行った。釜ヶ崎は日本の都市労働史が色濃く残る地域であり、「歴史の見えるまち」としてまちづくりが推進されている点が特徴的であった。 5 月には、10 名が京都市南区東九条を訪問し、在日コリアン集住地域におけるコミュニティカフェの役割、都市開発と地域社会の変容、ニューカマー移住労働者の現状について関係者から話をうかがった。地域と密接に関わる場での対話は、参加者にとって貴重な学びとなった。 7 月には、8 名の参加者が名古屋市においてフィールドワークを実施し、ホームレス当事者から現状や福祉制度の課題についての声を聞いたほか、フィリピン系住民から、ナイトタイムエコノミーに従事する人々の労働環境について話を聞く機会を得た。 11 月には、京都大学 URA と連携し、フランスの EHESS および INED の研究者・大学院生とともに再び釜ヶ崎を訪問した。また、京都市北区にある地域密着型特別養護老人ホームも視察した。計 15 名の参加者は専門性の高い知見を持つ者が多く、現場では活発な質疑応答が交わされた。 以上の活動を通じて、国内における多様な社会課題を英語で学ぶ実践的な機会を提供し、国際的な視点からの理解を深めるとともに、参加者の問題発見力と多文化的対話力の向上に資する成果を得た。